



● いちます やすひと

株式会社駿河屋代表取締役 九代目当主

1969年 材木商 駿河屋の九代目として生まれる

1992年 大学卒業後、スターツ(株)入社  
現場監督をしながら建築を学ぶ

2002年 駿河屋の代表取締役に就任 現在に至る  
東海大学工学部建築学科卒、SBI大学院大学経営管理修士、  
一級建築士、一級建築施工管理技士、宅地建物取引士、  
一級電磁波測定士 他

<https://surugaya-life.jp>

Interviewer 山上 晴美

# 人生の質を高める 家づくり

1657年に材木商としてスタートした駿河屋さんは、今年創業360年。現在は、住む人の心身の健康のために自然素材で家をつくっています。家は、つくり方次第で、健康だけでなく、家族関係や行動習慣にまで影響するそうです。どう

やら、人生の質を左右するほど大切なものなのか。見た目の美しさや利便性だけで選んでしまいがちですが、一生のうちに何度もない買い物。聴いておきたい大切なお話を九代目の一樹靖人さんからうかがいました。

## 『論語と算盤』を起点にした 経営を学んで気づいたこと

——駿河屋さんは、現在、素材にこだわった家を作る建築業・不動産業として事業を運営されていますが、もともと古くから続く材木商だったそうですね。どんなことから現在の形態に変わったのでしょうか？

一樹…1657年に創業の材木商ですが、実際には、東大赤門前にある法真寺にあった過去帳が1657年の明暦の大火で焼失したという記録が最古のため、その年を創業としています。また、家系図も私を含めると九代までしか記録がないことから、現在私が九代目を名乗っています。父の代まで材木商をやっていたのですが、だんだん売れなくなってきたので、マンションの賃貸業をして生き残っていました。私も幼い頃から、これからは材木はダメだから他の仕事を考えなさいと言

われていました。父が引退して材木商をやめたので、悩んだ末に建設業としてのれんを継承することになりました。賃貸の清掃業から始め、一般住宅の建設業へ成長させていき、大手の下請けとして利益も出ていたのですが、下請けは元請けからそれなりの圧力もかかりますし、誰がやっても同じ商売は面白いと感じられなかったのです。そんなときにリーマンショックが来て、ますます締め付けが厳しくなりました。自分が面白くない仕事を、次の世代に渡すというのはどうなんだろう。本当に自分がやりたいことは何だろうって、すごく悩んだ時期だったんですね。ちょうどそのとき、社会人大学院大学という起業家を育成するビジネススクールとご縁ができたので、そこに入学することを決意しました。そのビジネススクールは『論語と算盤』のように、経営と人間学を学ぶ中国古典を経営学に取り入れたMBAスクールだったので、そこで社会に役立つ事業を考えてきたのが

※山上晴美(やまがみはるみ) 編集、ライター、ライフコーチ、広報ナビゲーター  
有限会社木嶋舎(もくそうしや)代表 演劇、広報、出版の分野で創作、表現、発信に携わり、  
「ライフ&スピリット」を指針に、「心と身体と命」のための「衣食住」をソワフルな視点で探求、発信している。



左から山上晴美、一樹靖人さん

父親がサラリーマンという子はいなくて、みんな個人商店や工場などの家内工業。給食に出てくる豆腐なんかは同級生の誰々さんのお父さんがつくっているとか、町内の誰々の家はあの大工さんが

今の事業形態です。ところが新たな事業をスタートし、モデルルームもオープンした途端、元請けからの仕事が来なくなってしまう、借金がどんどん増えていきお金も借りられなくなり大変な状況になったのです。それは予想外のことではありましたが、逆にそのことで一気にスイッチが切り変わったように感じました。それをきっかけにさらに新しい事業に進進し、今ではお客様と一緒に、納得の行く家づくりができるようになりました。

どの業界でも、元請け、下請けがあつて成り立っているのですが、ものをつくる立場としては、使い手の顔が見えて、その方のために心をこめて仕事ができることが一番の喜びです。

### つくり手の顔が見える家を建てる

——ビジネススクールで、社会に役立つ仕事というヒントを得られたということですが、家の素材と住む人の健康ということに着目されたのはどんな

なきっかけがあつたのでしょうか。

一樹：岩手の農家に嫁いだ姉が野菜をつくって農協に出しています。その姉から形も大きさも違う無農薬の野菜が届いたときに、なぜって話をしたら「農家はたいいていそう。自分たちはこういう農薬を使つてないものを食べている」という答えが返ってきました。それで、食べ物のことを調べていくうちに工場で作られたものはたくさん食べないほうがいいのか、メーカーでも、社員が食べる自社製品には制限があることなどもわかってきました。結局自分が欲しいものをつくっている会社ってどのくらいあるんだろうって思ったときに、以前一緒に仕事をした大工さんの家は無垢の木だったことを思い出したのです。住宅業界もみんな一緒だと、後ろめたく感じたことが、自分も住みたくなるような家づくりを考えたいきっかけでした。

後は、生まれ育つた環境もあります。墨田区という町は、商業と工業が多く、子どものときには、

建てたんだとか、全部顔が見える社会だったんです。それがだんだん希薄になってきて、安いから壊れたらまた買えばいいという社会に変化してきました。衣類も安くなって、つぎはぎしている子もいないし、ものも粗末にするようになってしまった。なぜ社会はそうなったのかと考えたとき、「つくり手の見えないこと」が原因の一つではないかと気づいたのです。

ものには命があるとか、つくったものにはつくった人の魂が宿るとか、昔から言われてきたことです。であるならば、住まいは魂の集合体ではないかと想つたんです。住まいをつくるつくり手はもちろん、素材づくりから真摯に取り組んでいる人のものを使うことで、本当の意味で「良い気の宿る住まい」になるのではないかと想いました。

事業継承をしたときに、残った材木の産地を調べたら、どうやら産地と消費者の間には7社から8社くらい入っているらしく値段も高くなつてい



施行中に現場監督の皮膚炎が治ってしまったモデルルーム「空まめの木」

——とても大切なことですね。では、すぐに家を購入したり建て替えたりはできないけれど、せめて今の住まいで健康的に暮らしたいと思ったら、どんなことに注意したら良いでしょうか。

一樹：家において体調が悪くなる人は現代の住宅をつくっている新建材の影響もありますが、家に持ち込む「物」によることも多いです。防虫剤、消臭剤、除菌剤など、生活に取り入れると便利だけれども化学物質と呼ばれるものの量を見直すことも大切だと思います。

以前、弊社のモデルルームにいらしたお客様の息子さんがひどいアトピーでしたが、宿泊したら治ってしまったということがありました。原因は、おじいちゃんおばあちゃんが大量に買ってくれたおもちゃなどでした。寝室のおもちゃテントの中にたくさん入っていて、換気もしていなかったのので、プラスチックや塗料などの素材が原因になっていたことがわかりました。普通の住宅だったん

る。産地を訪れてつくり手に会い、品質を見極めながら相手の想いも汲みとり、それをお客様に伝えたい。そんな想いが芽生えてきたのです。それで、木の伐採や畳のイグサ農家にお客様をお連れして、生産者の想いに触れる機会をもうけているのです。素材にこだわるといことは、自然素材そのものへのこだわりもありますが、つくり手の想いや姿勢を伝えることも大切なことだと思っています。住宅に使われる素材はグレーな側面も多いので、誠実に良いと思えるものを自信を持って届け、誇りを持って仕事をしたいです。

昨年不動産業も始めてからは、何カ月もかけて長い時間お客様と一緒に物件探しをしています。不動産業界の「売ったら終わり」的な姿勢は業界の構造的にやむを得ない部分もありますが、それで不幸になる人が目の前にいるのを見て、もうこれは私たちが不動産の知識を持たないとダメだと思っただけです。

不動産選びに「建築的視点」を取り入れながら、より正しい形で不動産の購入をサポートしていきたいし、お客様自身が気づいていない、家族の幸せのための家はどんなものなのかということも、最初から一緒に考えていこうと思っただけです。不動産購入の際には、前もって伝えたいといけなことがたくさんあるので、業界の既存の慣習を破って、正しい情報を届けていきたいと思っています。購入予算を決めるのも、銀行が貸してくれるからではなく、生涯の収支計画をしっかりとてながら、お金の返済計画やライフプランも含めて進めていただくようにしています。せっかく理想の住まいが完成したのに、ローンが払えなくて手放してしまっただけは何のためにつくったかわかりませんから。

**心地よい住まいの第二步は、  
持ち込むものを見直すことから**

人生の質を高める家づくり

ハシノキ  
朴 檜  
楓 夕毛  
タ 小松  
姫 力バ  
カ 桂 松  
赤 桧  
栗 榎  
桜 プナ  
鬼 胡桃  
沢 胡桃



住宅に使う針葉樹と広葉樹

左 人工的に乾燥させた杉板

右 自然乾燥させた杉板

香りが漂うのはとても気持ちがいいものですね。その辺りの木のこともお聴かせください。一樹：木の種類としては、住宅に使うのはだいた

ですが、柔軟剤もたくさん使っていたのでそれも関係していると思います。おもちゃの安全基準はドイツなどが高いことで有名ですが、日本はまだまだ経済合理主義なので難しいのかもしれない。国の法律が良ければ安心、他人が大丈夫なら自分も大丈夫というわけではないのです。自分の体は自分で守らなければなりません。一樹さんが書かれた冊子のタイトルは『美味しい空気の創り方』ですが、家の空気のことばかり意識していませんでした。一樹：住んでいる家で具合が悪くなったとしたら、シックハウス症候群や化学物質過敏症が考えられます。シックハウスのほうはその家から離れれば大丈夫ですが、過敏症のほうは複数の化学物質に暴露すると意識がもうろうとしたり倒れてしまったりと脳に障害が起きてしまう病気です。どうやら、引っ越しを繰り返す人にそういう症状が多く、新材材でリフォームして濃度が高い所に繰り返し

住むからなのです。1990年代に社会問題となった「シックハウス問題」ですが、2003年によく法改正されました。人体に影響のある化学物質を規制する法律です。しかしすべての物質を規制することはできないので、住宅内部に新材材から揮発される化学物質を24時間換気しなさいというのが現代の建築基準法です。でもこの「24時間換気システム」はリフォームには適用されてないので、新材材でリフォームをした住宅に住むということは、あまり良い環境ではないと言えます。こうしたことから、お客様には、空気の影響は意外と大きいということを伝え、自然の木材の良さを見直してもらえればと思っています。

家の柱になる木を自分で伐採する喜び

——家に使う木の伐採ツアーをされているくらい、木へのこだわりがあるとのことですが、家に木の

い杉や檜です。後は南会津の広葉樹など、目が細かくて硬いもの。桜、栗とかも使いますし、お客様の田舎に山がある方はそちらの木を使いましょうと提案することもあります。そうした家では、お父さんやお母さんの故郷の木だという話をお子さんにされるのではないのでしょうか。それを聴きながら育ったら、いずれその家が取り壊されることになったとしても、「この木を新しい家でも使いたい」と思ってくれるかもしれない。そんなことが今の時代にはとても大切だと思うのです。

木の伐採の時期ですが、月の満ち欠けに合わせて新月伐採をしています。これはオーストリアの営林署に勤めていた方が書いた書物にあるのですが、簡単に説明すると「おじいちゃんの言う通りに月の満ち欠けに合わせて木を切ったら木がよくなった」と書かれています。その翻訳本が出版された際に、日本でも専門家が実際にやってみたのですが、何も変わらなかったのです。新月から伐

採を始めたのですが、正しくは「新月までに伐採する」ということがわかりました。大学でもエビデンスが出され、木の腐り方や割れ方も違って、カビも生えづらく、虫に食われにくいということがわかりました。中のでんぶん質のバランスが変わるからではないかと言われています。それならば、日本では今までどうしていたのだろうと、宮大工の西岡常一さんに聴いたところ、「そんなの当たり前で誰も言わない」という返答が返ってきました。最古の建築の本にもそのことが書かれています。日本でも昔から行っていたことがわかります。農業も、昔は月のサイクルに合わせてやっていますね。

また、木材の乾燥の方法ですが、「天然乾燥」と「人工乾燥」という方法があります。現代は「人工乾燥」の木がほとんどですが、昔の木は自然のままに乾燥させる「天然乾燥」でした。本来、木は山で伐採したら数カ月、枝葉がついた状態で

——自分の家で使う木を自分で切るといのはとても感慨深いですね。その他に畳をつくるところも見ることができるとですね。

一樹…ご自宅に納める畳の産地にお連れすることがあります。お客様はとても良い体験をしたとおっしゃっていました。今、国産の畳は市場の2割を切っていて、近い将来畳は民芸品になってしまうと言われるほどです。私たちは産地である熊本の八代に毎年「産地研修」に行くのですが、お客様の希望があればお連れして、農家さんと話したり、イグサを見たり、乾燥が終わったのを見て本物の価値をお伝えしています。その後、お客様のご自宅にその畳を敷いたら、「ほのかに畳が光っているようだ」とおっしゃってくださいました。本物の価値というのはそういうもののだと思います。木材の伐採もそれとまったく同じだと思います。

「葉がらし」という乾燥を行います。この「葉がらし」や「天然乾燥」を行うと、木が本来持っているアロマ成分がしっかりと残り、色つやも良いままです。しかし熱を加える「人工乾燥」の木材は色も変わり、香りも残りません。「天然乾燥」のほうが良ければ、みなそうすれば良いと思うかもしれませんが、現在の林業は不採算産業のため、切ったらずくに山から降ろして乾燥し、商品化しないと現金化できない。それで、品質の良い天然乾燥材が市場に出回することは非常に稀まれになってしまったのです。

伐採ツアアの時期は9月から1、2月が最適で、その間3回くらい行きます。自分で切った木で家を建てるのは、乾燥に最短で1年、木を切ったから家が建つまで2年くらいと時間がかかりますが、その期間、待ち続けるのも楽しみですし、時間をかけて建てた家だからこそ、愛着もわくのではないかと思います。

### 人とのつながりを大切にする

#### 「家づくりと親子のイベント」

——親子で参加するイベントなど、家づくりとは別の催しをしていると聴きました。

一樹…この事業をやる前から、個人的に千葉県の鴨川かみがわで稲作をする自然体験をしていました。田植え、草取り、かかしづくり、刈り取り、脱穀、収穫祭など、6回くらいの工程があるのですが、お米を作るために、自ら汗を流すことで、食べ物への感謝を学ぶことができるし、家づくりの担い手としてもとても学びの多い体験です。これを多勢に体験してもらうために、会社全体で稲作体験をするようになりました。少しずつお客様や友人知人も集まってくれるようになって、現在では千葉の市原に畑を借りて、スタッフと一緒に無農薬野菜の栽培も行っています。

その他にも、木工教室や自然体験を開催して、

※西岡常一(にしおかつねかず):1908~1995年。祖父、父と共に法隆寺の宮大工棟梁を務めた。「最後の宮大工」として、飛鳥時代から受け継がれていた寺院建築の技術を後世に伝えてきた。文化財保存技術者、文化功労者、斑鳩(いかるが)町名誉町民。著書『木のいのち木のこころ』他。

木や自然に触れる機会を設けています。去年はキャンプを企画して、魚を捕まえる、火おこし、魚のさばき方、ナイフの使い方など、生きる力を養うことを子どもたちに伝えました。

——家をつくるだけではなく、子どもたちに自然への理解や、人とのつながりの大切さを伝えていくのですね。

一樹…そうですね。つくり手と住まい手の想いをつなげるというのが会社の社是にも入っています。が、工事の前と後に「あざない式」というセレモニーをします。お客様と職人と私たちが一本の縄になるという意味を込めて、お祝いや誓いの言葉を伝えます。工事中もできる限りお客様に見てもらって、終わってからでもセレモニーをしてお引き渡しになります。でもそこで工事が終了ということではなく、またつながりを新たに築きましようという気持ちを込めています。

これは不動産の価値としてはなくなってしまっています。広過ぎる家は家族の愛が空虚になります。子育て世代には少し手狭な家にして、子どもが巣立って夫婦で丁度良い広さのほうに、売却や賃貸にしても動きやすいとアドバイスしています。

——家を建てることは、住む人の人生全般に関わることなのですね。

一樹…家の間取りは人生をも変えると伝えていますが。間取りは日々の行動習慣を変えらる大きな力を持つています。この行動習慣が人生を大きく変えるのです。間違った間取りにすると家族のトラブルになったり、コミュニケーションがうまくいかなくなったり、するのです。個室を与えるタイミングが悪いと、引きこもりや登校拒否につながる

と専門家は言っています。

——間取りと人生の関係は目からウロコです。行動がかわれば日常がかわり、人生の質も高まるということなのですね。今年には駿河屋さんの創業

## 間取りは行動習慣を決め、行動習慣は人生の質を決める

——お話をうかがっていると、住む私たちがある程度目利きになることも必要だということがわかります。例えばマンション購入の際に見るポイントはどこなところですか？

一樹…それは山のようにあって、簡単にはとても言い切れないくらいです。ビル建築の経験から、タイルの張り方一つで、現場監督がちゃんと考えて仕事をしているかどうかわかります。中古の物件で、築年数が10年たった建物でコストを削って建てた物件とそうでない物件は歴然とした差が生じます。でも一番大事なのは建物の構造としてしっかりとしたものかどうか。そして、不動産そのものが将来的に資産となるか負債となる建物かどうかを考えます。家は広いほうが住み心地が良いと思われがちですが、将来的に需要がなければそ

360年という記念すべき年ですね。会社としては、ますます上質な人生のための住まいづくりを。一樹さん個人としてはどんなことに取り組んでいきたいですか？

一樹…自由人なので一カ所にいられないんですね。今の仕事は責任を持って次世代へバトンを渡したいと思っています。それが無事に済んだら世界を自由に放浪したい。趣味でやっている登山やバイクなどを海外でやりながら旅をしたいです。自分自身の可能性や新しいことや刺激があることを楽しく探求したい。今の事業にこだわりがあるのはその性分だからでしょうか。だから、わざわざ産地まで行ったりしてしまうのかもしれない。

——心身の不調は家や部屋にあるものが原因ということが考えられるということですね。家族関係や行動習慣や、家は人の人生に大きく影響を与えているということも新たな発見です。ためになる住まいのお話をありがとうございます。